『最後の場所で』における反復性
Repetitions in *A Gesture Life*

丁　昭靜
Sojung Jung

はじめに

あることを何度も繰り返すという反復はしばしば文学作品を読む過程において発見され、その意味を明らかにすることによってテクストの解釈が可能になるときがある。Ｊ.ヒリス・ミラーは、『小説と反復―七つのイギリス小説』の中で小説は反復に気づくことによってある程度解釈されると述べ、さらに以下のように記している。

> 小説において二度もしくはそれ以上語られたことは事実ではないがもしれないが、読者はそのことが重要な意味をもつと考えてまず差し支えない。およそ小説は反復、反復のなかの反復、他の反復と鎖状に繋がった反復からなる複雑な薄織物である[110]。

ミラーは、上記のいずれの場合にも作品内部の構造を構成すると同時に、外部にある様々な関係を決定づける反復が存在すると主張している。

ジグムント・フロイトの分析の中にも反復に関する箇所がみられるが、それは、無意識のうちに、死の欲動から発する「反復強迫」の支配があることを認めている。ここで言われる死の欲動とは、全ての生の目的は死であり、その本能は個人を死んだ状態、生命のないものに戻そうとする衝動のことである。そして、この初期状態へと戻ろうとする欲動は苦痛を与える行為を繰り返すことによってあらわれる。フロイトの反復するという主題を説明するために、マックス・ミルネールは、フロイトの一九一九年の「不気味なもの」を取りあげている。

> すでに、フロイトは次のように指摘していた。『悪魔の霊液』のような分身の主題をあつかった物語は、無気味な印象が説明しがたい特徴やエピソード、さらに同一の仕方で再現する要素の反復から生みだされた、さまざまなエピソードから成りたつと[111]。

---

[110] J.ヒリス・ミラー『小説と反復―七つのイギリス小説』玉井あきら訳、英宝社、1991 年、5 ページ

[111] マックス・ミルネール『フロイトと文学解釈―道具としての精神分析』市村卓彦訳、ユニテ、1989年、223ページ

ミルネールは、フロイトがこのような反復から生じる効果が幼児の心理的生活と結びつくということを 「快感原則の彼岸」(死の欲動の概念を提示している)で説明していると付け加えている。

このように、様々な形で存在し、読まれ、解釈される反復はあらゆるテクストの中でみられる。それは、アメリカの小説『最後の場所で』においても当然のごとくあらわれる。そして、その反復をどのように読むかによってその対象が与える意味も変わってくると考えられる。ここでは、このテクストに存在する反復性を読みとりながら作品の分析を行うことにする。

一九九九年にアメリカで出版された小説『最後の場所で』は、韓国系日本人である主人公ドク・ハタ(黒畑治郎)と呼ばれる老人をめぐる過去と現在の出来事を彼自身の言葉で語っている。現在と過去の回想を繰り返す中で、彼の物語には過去の人物少女Kとメアリー・バンーズ、そして過去でありながら再び現在の存在として登場する養女サニーとの出来事を中心に幾つかの反復性が見られ、それがストーリーにおいて重要な役割を果たしていると考えられる。つまり、テクストの反復性を見ることでそれが示唆するものが読みとられるということである。ここでは、作品の内部と登場人物をめぐる状況に関する反復性だけに焦点をあてることにする。そして、それらがどのように反復され、またその繰り返しにどのような差異が見られるかを分析し、主人公ドク・ハタや物語の結末にどのような影響を与えているかを考察することでテクストのもう一つの読みを試みる。

1. 泳ぐこと

物語の主人公ドク・ハタ(ドクター・ハタの略称)は、アメリカの小さな町、ベドリー・ラン(主人公が名付けた仮の名称である)という地域に住んでいる。三年前まで経営していた「サニー・メディカル・サプライ」という医療用品や器具を販売する店をヒッキー夫婦に売り渡し引退生活を送っている彼は誰もが憧れるような邸宅で暮らしている。不動産屋のリブ・クロフォードは、独りで生活をしているドク・ハタに今の家は管理や手入れをすることが厄介なため、比較的に生活しやすく何の心配もない最高級マンションに移ることをすすめる。しかし、ハタは、「通常の引退後のライフスタイルにはあまり魅力を感じない[112]」と語りながら、二階建てのチューダー・リヴァイヴァル式の屋敷に愛着、またある種の執着をも抱いている。彼はその自分の家にあるプールで毎朝「一二往復半」泳いでいる。そして、水泳の後にはいつもシャワーを浴び、キッチンに行き事前に準備しておいた朝食をとる。このような彼の強迫的な反復行為と見られる毎朝の生活ルーチンにある日少し変化が生じる。

[112] チャンネ・リー『最後の場所で』高橋 茅香子訳、新潮社、2002 年、24 ページ

しかし今朝は、光のない水面下で（プールの底と側面は周囲の石に合わせた戦艦のような暗灰色だ)、とつぜん自分のプールで泳いでいるのではなく、どこか別のところ、近所の家のプールとか、もしかしたら池にでもいるような思いにとらわれ、胸が締めつけられて、水を飲んでしまった。水中眼鏡をむしりとる。身体がふらふらと底の方に沈んでいく。目をこらすともちろん、私はどこでもない、自分の家のプールにいるのだ[113]。

ドク・ハタはもう泳ぐのをやめて家に戻るが、すぐ熱いシャワーを浴びに行かず、暖炉に向かってきつけを起こす。ここで、ハタは自分の養女が高校時代に授業で使ったらしい古い本の中の、ある物語を思い出す。その物語は以下のようなものである。

…ある日、他人の家のプールで泳ごうと決心する男の話で、彼は近所を家のプールをつぎつぎとまわるのだが、その町の描写がベドリー・ランと非常によく似ている。話がすすむにつれ、男は「その地域の端から端まで泳ごう」と決めて、近所を歩きまわり、他人の家の塀をよじ登り、人や車でいっぱいのパークウェイを横切り、苦労のすえにようやく自分の家に帰りつくのだが、なんと鍵がかかっていて誰も住んでいず、まったく訳がわからなくなる[114]。

火を前にしてまた思いをめくらしたハタは、自分の毎朝の往復的な泳ぎを見た人は彼が美しい引退生活に入りそれが望ましく思えるかもしれないが、一方で、もの悲しさにと同時に虚しく冷たいもの、でもありうるとふと思う。それからいつものどおり食卓に向かい、食事をとろうとする。しかし、その前にリブからの電話あり、それに出ている間に暖炉の火が燃え移り火事が起きてしまう。幸いなことにリブによって病院まで運ばれたドク・ハタは命を救われる。この火災によって彼は養女であるが数年前に家を出て行ったサニーから快癒のはがきをもらい、それがきっかけにサニーとの再会をはたすことになる。

まず、最初に、ここで「泳ぐこと」という反復行為は、主人公の「居場所」に対する強迫観念と考えられる。自分が作り上げてきた裏庭で毎朝同じ回数だけ泳ぎ、シャワーを浴び、そして食事を済ませるという反復から彼は自分がいる場所の存在を確認しているのである。そして、突然その感覚が薄まり反復にひびがはいることによって、自分の場所とその存在について考え込むようになる。この過程で、「泳ぐこと」は古書中の物語として再び登場する。主人公が住む町と似たように描かれている古い町、そして近所の家をさぐる行為が泳ぐことと表現されてあり、それは反復とよみとる。さらに、ここで注目するべき点は、その終わりである。隣人の家のプールを泳ぎまわった男は、最後に再び自分の家に戻るが、そこは鍵がかかっていて誰もいないという「訳の分からない状態」になっている。これは、ドク・ハ

113 同書、28 ページ
114 同書、29ページ

タが自分のプールで感じた感覚と似たようなもので、読者に主人公の思い込みが自分の居場所について問うものを示していると考えられる。彼の居場所に対する執着や執念は、小さい頃に黒畑家に養子として入り、実は朝鮮人でありながら日本人として生きる、また、戦後にはアメリカという地域で異邦人として生きるという過程の中で生じたものと考えられる。そして、定着する場所や自分の存在を表す場所を物質的な「居場所」である「家」に投影し「泳ぐこと」と毎朝の生活の強迫的な反復行為で確認をしているのである。

次に、泳ぐことの規則的な生活の変化は、主人公がその次の過程へ移動していくことを意味する。いつもの行為とは違うことをすることでハタは予期せぬ出来事に出会う。そして、その過程の中で次第にある種の強迫観念から解放され、最後には泳ぐことを減らし自分で開拓した道の散歩という反復に移行する。更に、彼はそこに留まらずその反復もやめ、現在住んでいる土地を去って行こうと決心する。自分の「居場所」を絶えず望んでいた思いが徐々に解消され最後には新しい場所へと向かようになるのである。

2.　少女K、メアリー・バンーズ、そしてサニー

ここでは、主人公ドク・ハタ(黒畑治郎)と彼の過去と現在に存在する三人の女性の反復について考察する。分析にあたって、三人の女性と反復から読みとれる意味を全体的に明らかにし、次に、主人公と三人の登場人物をより細かく分けて述べることにする。

ドク・ハタの記憶にある過去の人物少女Kは、一九四四年、彼が戦争で医務士官として勤めているときに出会った韓国出身の女性である。本当の名前は、クッテであり、少女Kは主人公の私がつけた呼称である。大尉の命令によって特別に隔離されて生活する少女の世話をするようになった黒畑は少女のことを愛するようになる。そして、戦争が終わったら彼女と結婚することを望むが、それは夢話にすぎなく現実的に不可能なことであった。結局、Kは死に、戦争がおわりしだいアメリカに渡った黒畑はサニーを養女として貰い現在の家で二人で暮らすことになる。そして、年月が経ちサニーが十一歳のとき彼は、隣人であるメアリー・バンーズという女性と知り合い恋人関係になる。メアリーはいずれかハタとの家庭をもつことを望みそのときに備えサニーとも親子のような関係を築こうとするが、度々上手くいかず挫折してしまう。アメリカで生活を始めるとき、ドク・ハタは配偶者は求めないと決めたのだが、メアリーの存在や彼女の願望を徐々に否定しなくなり、寧ろ彼女との未来を考えるときもあった。しかし、恋人の消極的で義務的な態度にメアリーは別れをつげ、のちに癌で亡くなる。一方で、徐々に家と義務的な父親に不便を感じ始めたサニーはやがて思春期にはいりその思いを表に出す。そして、結局家出をしてしまう。彼女は一度家に帰って来たこともあるがまたすぐ家を出てしまい、はがきのお礼で父親が自分を訪ねて来るまで再びベドリー・ランに戻ることはなかった。このドク・ハタと三人の女性との関係性には「家族」という主人公の強迫観念があると考えられる。

そして、家族を作ることを望むが毎回「挫折」し、重なる失敗にもかかわらず絶えずそれを

欲しがることが似たような状況の反復としてあらわれる。また、そこにはある種の「義務感」というものが作用している。それは、少女 K にとっては肉体関係をもったことからくるもの、メアリー・バンーズにはあくまで恋人関係からくるもの、そして、サニーには養女をもらったことからのものだった。そして、この反復の中でみられるもっとも大きな差異はサニーとの「再会」と彼女の子どもである「トーマスという存在」だと考えられる。サニーと数年ぶりに会ったハタは、トーマスの存在に気づき、娘の代わりに時々彼の面倒を見ることになる。しかし、サニーはドク・ハタがトーマスの祖父であることを知らせたがらない。そして、ハタ自身もそれについて否定的な意見を持たない、単に「家族の友達」として残ろうとする。つまり、主人公である「私」は娘と再会し自分の孫にあたる存在にも出会うが、その過程で家族という関係に執念や執着をもち義務をはたそうとしなくなったのである。

主人公と三人の女性をめぐる反復性は「家族」の形成にこだわる「私」の姿を描き、望むことが果たせず挫折することで表現される。そして、反復する要素の変化やその中の更なる反復でそれの意味を深める。ここでは、「私」、少女 K、メアリー・バンーズ、そしてサニーの各々の反復性やその過程を細かくみることでより深い考察を試みる。まず、主人公の守るべき対象であった少女 K がもつドク・ハタと同一の要素は「出身」である。そして、これはサニーにおいても同様に反復される。朝鮮人であることを認めないわけではないが表に出そうとしない黒畑は、同じ朝鮮半島から来たクッテとサニーに何らかの共感を覚える。これは自分の存在、つまりアイデンティティの繋がりに気づいたことを示している 。そして、彼はそのような存在と家庭を築きあげたいと思うのである。また、二人の女性には「性別」の反復もみられる。アメリカに渡り片親として養子縁組を結びたいと思った主人公はようやくサニーをもらうが、その過程で彼は「女の子」にこだわる。

> しかし、私は女の子、つまり娘が欲しくて―この点に奇妙に（今も思うと）固執した―最後にとうとう斡旋所の女性が電話してきて、一人見つけたと言った。それ以上はなんの説明もなかった。女の子を欲しいという気持ちは、斡旋所の女性が男の子を見つけると言った瞬間までなかったもので、私はとつぜん彼女の言葉をさえぎり、いかに娘をほしいと思ってきたか説明したのだが、…

自分は無意識の内に「女の子」を欲しがるが、これは主人公が少女 K に何らかの責任感あるいは、義務感を抱いていて、彼女と家庭を作るということを女の子をもらうという形で反復しているとも読み取れる。次に、主人公とサニーの反復性については両者とも養子になったことがあげられる。ベドリー・ランでドク・ハタは独身として生きることを決めるが、自分自身の家族がつくりたかった。それで、養女を迎えることになるのだが、そのこだわりは結局挫折に終わってしまう。ここで、家族になるということの挫折はメアリー・バンーズにも同じく起こるが、それは、主人公がサニーに父親がいる家庭を作ってあげられなかったのと同様、彼女に母親の存在を与えようとする夢が破れてしまったことを意味する。

少女K、サニー、そしてメアリーの挫折という状況の繰り返しと過去の反復に変化が加わった反復、そしてトーマスという新たな存在によって、ドク・ハタの「家族」に対する執着や執念や義務感は次第に弱まり、主人公はサニーとの和解と共に更に変化した家族の次の段階へとすすむことができる。

3. 死

なぜ私の通る道はすべて、どこかの病院のうらぶれた、すすけた病棟につながることになるのだろう。狭いけれども片づいたレニーの事務所に座っていると、息がつまりそうだ。いやもっとひどいかもしれない。どうして、骨の髄まで縮こまった取るにたらない人間が、仲間や友人たちやようやく見つけた愛する人々に暗い陰を投げかけ、病いと死ぬべき運命をちらつかせる帳(とばり)となってしまうのだろうか。彼らはみな（ほとんどが)、最後に彼を知って幸せだった、いまも知り合いでいられて幸せだと告白する。彼に電話をよこして優しい言葉をかけ、自分の部屋に招待し、彼の家に花を送ってきさえする。感謝をするべきなのは本当は彼のほうで、その十倍も花を返して当然なのだ[115]。

これは、主人公の存在について彼自身がどのように思っているのかがよく分かる一節だと考えられる。ドク・ハタは、町では人々の尊敬を受け感謝される存在であるが実際のところはそれとは逆で、彼あるいは彼女たちこそがハタにとって感謝すべき存在なのである。なお、彼は自分の周りには死がいつもつきまとうと感じ、自身をまるで冥土からの使者のように思っている。ここで示されているように「私」の周りで繰り返し訪れる「死」という状況は反復として読みとることができる。彼が初めて死に出会ったのは戦時中のことであり、それから幾多の死について回想を繰り返していが、その中で反復として見られるのは「仲間や友人たちやようやく見つけた愛する人々」の死である。つまり、それは、少女Kを始め、メアリー・バンーズ、運営していた店を引き渡したヒッキー婦人、そして火災のときからずっと交流をし続けたレニー・バネージーとトーマスをめぐる死のことであり、彼あるいは彼女たちはそれぞれ主人公がある種の愛着をもっている対象だと考えられる。

主人公の「死」に対する考えは、前で述べた「居場所」と「家族」のように彼の執着や執念として捉えることができるが、それは少女 K であるクッテの死によるトラウマから生じたものだと考えられる。ドク・ハタが愛する存在であり誰よりも守りたかった少女 K の死は、悲惨なものだった。小野大尉が彼女を特別に扱った理由は彼も彼女に何らかの愛を感じていて、キャンプに慰安婦として連れてこられた彼女に他の兵士たちの相手をさせたくなかったからである。そして、大尉が夜彼女のところへ来ることを暗示する黒い旗が掲げられ

115 同書、356ページ

た日、少女Ｋは主人公に自分を殺してくれと頼むが、彼は彼女の願いに応ずることができなかった。結局、少女は医療用ナイフを使って直接大尉を殺し、歩哨担当の中尉に傷を負わせることでその報復しとして死をむかえる。主人公は彼女の死の場面を次のように描いている。

> …あたりを探る手の感覚が失われ、集めた遺体のかけらの重さも感じられなかった。そして私は、もうひとつの、奇蹟的にすべてがそなわった小さなその姿をついに見つけた。だが私はそれと実感できなっかたし、きちんと形づくられた足や、全部の指がそろった手を、まともに見ることができなかった。顔も、ととのった頬や額も、見ることができなかった。目覚めることのなかったその眠りは壊さず、乱されていなかった。私は自分が何をしているのかわからなかった、ほとんど覚えていないのだ[116]。

愛する相手の衝撃的な死とその人を助けられなかったという思いが、彼の周囲に起こる「死」をまるで(その死の形が必然的なものか偶然的なものかを問わず)自分が引き寄せているかのように感じさせるのである。また、彼はその死を放置してきたという罪悪感と責任感にとらわれている。しかし、トーマスとレニーの危機によってその反復に差異が生じる。それは、主人公がトーマスとレニーの命を助けたことである。プールで溺れたトーマスを助けるために水に入ったレニーが心臓発作を起こす。ハタは二度と死を放置することはできないと思い、二人とも無事救出する。溺れたレニーを助けた後はこう語っている。

> 「ああ、どうしよう、死ぬわ」リブは言って膝から崩れおちる。「死んでしまうわ」
> 私は答えない。彼女が正しいと恐れるからではなく、彼女が間違っていると確信するからだ。今日、彼が死ぬことがあってはならないのだ。そんなことは許されない――人生でたった一度が二度のことかもしれないが、一人の医者としてただ手をこまねいているものか。もし彼の胸のなかに手を入れなくてはならないのなら、私はそうする。なかに手を入れて乱暴に彼の心臓を掴み、かならず生き返らせる[117]。

「死」の反復に対する主人公の異なった態度や考えは過去の責任から自分を多少なりとも解放へと導いていると読みとられる。更に、ヒッキー夫婦の息子の病気を治すことにできるかぎりの支援をすることや、サニー母子が経済的に最小限の安定が保てるように支えることなど周りの危機に義務的ではなく、ある種の感情的で能動的な態度をとることという次の過程へと進んでいくことに大きな役割を果たすとみられる。しかし、ハタは過去のトラウマを完全に克服したわけではない。トーマスを助けたにもかかわらず、彼とその母親にまた暗い陰を落としてしまうのではないかと不安に思う部分もある。この点については、また異な

[116]同書、334ページ
[117]同書、355ページ

る方法や方向性をもって分析する必要もあると考えられる。

おわりに

『最後の場所で』の主人公黒畑治郎は、物語の中で絶えず自分のアイデンティティや居場所について問い続ける存在、物質的・精神的空間にこだわる存在として描かれている。また、彼の執着や執念はテクストの中で状況の反復としてあらわれる。繰り返される要素とその差異によってストーリーは次の段階へと移り、主人公の状況や考えも変わっていく。そして、読み手はそれぞれの価値観や視点をもって各々の解釈を展開する。ここでは、最初に主人公と彼の日常生活にあらわれる反復について考察を行った。テクストは「私」のアイデンティティや居場所を物質的に自分の「家」として示していると考えられる。そして、毎日の朝、直接念を入れて管理してきた裏庭のプールで泳ぐことでその存在を確認している。執念深い彼の行動は変化に向かい、新たな展開へと物語はすすんでいく。やがて生活ルーチンをやめ、自分の場所を変えることである種の強迫観念から解放されることになる。一方で、主人公の精神的なアイデンティティや居場所は「家族」として読みとることができる。また、少女 K、メアリー・バンーズ、そしてサニーの反復的行為がそれに対する執着と考えられる。家族のカテゴリーに所属したいという執念と挫折を繰り返す中で、主人公は再会と新たな存在によって徐々に強迫を切り抜けていく。そして、それまでとらわれていた義務感からも逃れることができるようになる。最後に、繰り返される「死」は、主人公ドク・ハタの強迫的な考えをあらわすものと考えられる。それは過去のトラウマによるものであり、反復の過程で彼の「死」に対する態度に差異が見られるものの、その衝撃からは完全に逃れることはできなかった。

今回は、テクストの内側に注目しそこに見られる状況の反復について考察を行った。具体的には、主人公の居場所、家族、そして死に対する強迫的な考えを「泳ぐこと」、「三人の女性」、「死」の問題という状況の反復と関連付けて分析した。今後の課題としては、反復される対象を少女 K(クッテ)に移し、テクストに内部だけではなく外部にも焦点をあてもう一つの読みを試みたいと考えている。

参考文献

一次文献

Chang-rae　Lee, *A Gesture Life,* New York: Riverhead Books, 1999.

チャンネ・リー『最後の場所で』高橋 茅香子訳、新潮社、2002 年。

二次文献

J. ヒリス・ミラー『小説と反復―七つのイギリス小説』玉井あきら訳、英宝社、1991 年。

マックス・ミルネール『フロイトと文学解釈―道具としての精神分析』市村卓彦訳、ユニテ、1989 年。